

糸川桜並木の再生について

(財)日本花の会 2008年9月29日

■なぜ熱海桜なのか

- 本州のどこよりも早く咲く桜の品種で、これだけでも話題性に富み、温暖な熱海のイメージを一層アピールできる。(日本人はいち早く春を感じたいと思っている)
- 日本一早く咲く熱海梅園の梅と熱海桜は同時に花を楽しむことができ、観光資源として相乗効果が期待できる。(現在、熱海梅園の観梅客で中心市街地へ足を延ばす方は少ないので、糸川桜並木を充実させることで市街地への誘客が期待できる)
- さらに‘熱海’の名を冠しているなので、外部の人が関心を持ちやすい。(熱海桜を全国区レベルの知名度にしていく)

観測地	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平均気温
熱海市	7.8	8.8	10.7	13.5	18.9	21.7	23.2	27.5	24.1	18.6	13.7	9.7	16.5
東京	5.8	6.1	8.9	14.4	18.7	21.8	25.4	27.1	23.5	18.2	13	8.4	15.9
小田原市	5.3	5.6	8.4	13.6	17.7	20.8	24.2	25.7	22.5	17.3	12.4	7.7	15.1
河津町	7.2	7.1	10	15.3	17.8	22.2	25.2	27	24.5	19.7	13.2	6.6	16.8

■周辺の花の名所と連携

早春の伊豆半島は花の名所が点在しています。

- 桜の名所では河津町(2月上旬から3月上旬)、南伊豆町(2月上旬から3月上旬)
- 梅の名所では熱海梅園(1月中旬から3月上旬)、湯河原梅林(2月中旬から3月中旬)、修善寺梅林(2月上旬から3月上旬)、東伊豆バイオパーク(2月上旬から3月中旬)
- 下田爪木崎のスイセン自生地(12月中旬から1月中旬)

などがあります。伊豆半島の花の名所の連携は、伊豆半島全域の観光のレベルアップにつながります。



写真左から河津川堤、南伊豆町の青野川、湯河原梅林(青野川、湯河原はホームページ引用)

■桜並木の見せ方について

桜並木を単一品種でつくった場合と複数の品種でつくった場合のメリットとデメリットは次のようになります。

	一つの種類	同時期開花の複数の種類	異なる時期に開花する複数の種類
メリット	見応えのある空間 統一した景観	見応えのある空間 いろいろな花が楽しめる 表情を変えられる	長い期間花が楽しめる
デメリット	開花期間が限定	開花期間が限定 景観が統一しない	花の迫りに欠ける 景観が統一しない
イメージ	花の‘ボリューム’で見せる		花の咲いている‘期間’で見せる



■熱海桜について

標準和名はカンザクラ。カンヒザクラとヤマザクラの雑種と考えられています。明治4年頃にイタリア人によって熱海市にもたらされ、その後増殖され市内に植えられました。落葉する亜高木で樹高は5m程度であまり大きくならず、自然樹形は盃状となります。樹皮は紫褐色で普通はかなり黒色を示し皮目が目立ちます。花序は散形状で2~3花からなります。比較的短い着花短枝の先端に固まって花を咲かせる性質があります。花は淡紅色で直径約2.5cm、5枚の花びらからなり、熱海市では1月下旬から2月下旬にかけて長く咲き続けます。落葉は遅く12月上旬まで着葉します。



■熱海桜の根元を彩る低木類の例と花暦

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アタミザクラ												
【常緑低木】												
ユリオブスデージー												
クチナシ												
ノボタン												
【常緑垂低木】												
キバナアマ												
【常緑小低木】												
ルリマツリ												
デュランタ												
【常緑半蔓性中低木】												
ブーゲンビレア												
【常緑匍匐性低木】												
コバノランタナ												



クチナシ ノボタン ルリマツリ ブーゲンビレア コバノランタナ